

---

# 夜神サユの場合

久能宗治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜神サユの場合

### 【Zコード】

Z5331BA

### 【作者名】

久能宗治

### 【あらすじ】

もつと面白いものが見たい死神リュークにノートを渡された夜神粧裕は、ノートを使ってリュークを面白くさせる。

交換条件として家族の敵である初代キラの正体を暴くために。

17話完結予定。

arcadia様でも投稿させていただいております。

## プロローグ

「一体、どうして分かつた……ありえないぞ……お前らは一体……」

フリードリヒ・ステルスシュタインは薄暗い部屋の中、椅子の上で目を覚ました。

目隠しをされ、両手両足を椅子の鉄パイプに縛り付けられていることに気づいて、たちどころに理解する。自分が捕まってしまったことに。

「ステルスシュタイン、あなたを第一級大量殺人犯として逮捕します」

目の前から若い男の声が聞こえる。

綺麗な英語の発音。おそらくイギリス人だろう。年齢は20代前半あたりか。

「教えてくれ。どうして俺だと分かつた。お前らはあのノートのことを知っていたのか?」

今の発言が容疑を認めたのと同じであることは、その場の全員が理解していた。

若い英国人男性が返事をする。

「あなたはインターネットを使って全世界の犯罪者を裁いていた。

まるで初代キラの行動を模倣するかのようだ。その手法から見て、あなたが相当なレベルのハッキング技術を持っていることも、こちらには筒抜けでした

「ニア、それ以上は

若い女性の声が左のほうから聞こえる。「ひらはぢりや、アメリカ人のようだ。

「あなたが第8のキラとして、まるで先祖返りするようなキラ復活劇を演じ始めたのは今から一ヶ月前の2013年9月から。あなたはそれ以降にあからさまな形で作られた犯罪者のリストには警戒して調査に当たっていました。しかし、あなたはあなたがノートを手にする前から存在していた犯罪者データには、比較的無頓着でしたね

ニアと呼ばれた青年の言葉を聞き、ステルスは心臓を驚愕にされるような気分になった。

「まさか……」

「私の推理ではあなたは2013年9月からノートを使って『神の裁き』をしていますが、実際にノートを手にしたのは同年の7月前半でしょう。つまりあなたはそれまでの空白の2ヶ月間で世界中のサイトを閲覧し、世界中の犯罪者のデータをしこたま書き集め、抜かりなく準備をしたうえで行動に移った。違いますか？」

「なぜそれを……どうして俺が7月にノートを手にしていたことを知っている……」

ステルスがそう言つと、隣にいた大きくて黒い影が、独特のしゃが

れ声で「あれ？」と間抜けたよつた声を出した。

「ひょつとして、俺の行動を読んでいたのか……すまないなあ。ス  
テルス。クククッ」

「リューク……お前……いや、それを読めなかつた俺の負け……か」

そう言えば、死神のノートが事件を起したのは、分かつているだけでも過去に8回。

ハートを使って何かをするときには、そのハートの媒介者である死神の行動パターンも考慮に入れておかなければならなかつたのだ。おそらくリュークは事件が終わるや否や、すぐにまた別の人間にノートを渡すという行動を連續で繰り返していったのだろう。

「我々はあなたがキラとして犯行声明を出す以前から、あなたの行動を追っていた。キラ事件は始まってから捜査していたのでは遅いからです。幾多の犠牲がそのことを教えてくれました。キラ事件の対処法は、それが始まる前に容疑者を絞つておくこと。始まる前にトラブルを仕掛けておくこと。それに尽きます」

ノートを手にして、それを使用する最初の日以降の行動ばかりに気を取られていた。

それ以前から存在していた各国機関のデータサイトには、『普通の』対策しか採つていなかつた。

相手はむしろ、そういうた過去の情報に最大限の罠を構築していた  
というのに……

「つまり……7月か8月に俺が潜ったサイトにウイルスが仕込まれていたってことか。信じられないな。いくら油断していたとは言え、俺を騙せるハッカーなんて、世界でも数人しかいないはずだぞ！」

「フィリップ・アーナーといふ名前を『』存知でしょ？」

「フィリップだと？ フィリップ・アーナーがお前らの仲間なのか？」

ステルスは驚いて立ち上がりそうになつた。  
世界最高のハツカ一集団のリーダーじゃないか。  
つまり俺は最初から負けていたということか。

「あーあ、お前、『負けた』な」

隣の死神『リューク』が、ステルスの感情変化を読み取つて静かに  
そう言つた。  
ステルスは恐怖で体が小刻みに震え始める。

「安心しろよ。なにも拷問して殺したりなんてしないんだから。お  
前は2番目に面白い奴だつたし、特別に『安楽死』にしてやるよ。  
ククク」

「リューク……ありがとう」

ガチガチと歯を鳴らしながら、ステルスはそう言って死神のほうに  
顔を向けた。

死神はニヤニヤと笑いながら腰のノートホルダーから一冊の黒いノ  
ートを取り出し、ガラスのようなペンで文字を綴つていく。

「そこに死神が居るのですね？」

目の前の青年が問いただす。

たったの3ヶ月で自分を追い詰めたイギリス人。

せめて、顔くらい見たかったと思ったが、それが叶わないことはステルス自身が一番よく理解していた。

直後、体の中が一瞬、熱くなつたかと思うと、自分の意識が急速に薄れしていくことに気づく。

「あ……」

わずかに声を漏らし、ステルスは椅子の上でガックリと首を折つた。

「終わりましたね」

ネイトはそう言つて歩み寄り、ステルスの死体の周りの空間を両手で探るようにかきまわした。と、何かが指先に触れる。

直後、ネイトの前に巨大な黒い死神リュークの姿が現れた。

「やはり、あなたが預かっていてあげたんですね。最近、少し人間への肩入れが大きいように思います」

「ククク……これくらいのハンデが無いと、すぐにお前らが犯人見つけ出して終わっちゃうじゃないか」

「まあ、そうですね」

「面白そつな奴だったけど、またお前らには勝てなかつたな」

死神リュークはステルスの目隠しを解いてやりながらそう言つてまたククツと笑い、ニア以下10名ほどのスーツ姿のS.P.Kたちを眺め回した。

「 もうそろそろ、人間を玩具にして遊ぶのはやめてもいいませんか 」

「 ネイトの言葉にその場の一団がギョッとする。 」

「 二アー。 」

小型のハンドガンを構えているハル・リドナーが咎めるような声で言つ。

「 それは出来ないなあ。俺はもう一度会いたいんだよ。初代キラみたいな面白い奴にな 」

「 もう言つと思つていました 」

二アはもう言つて、背後の誰にも悟られないくらい小さく小さく、口元で微笑んで見せた。そしてすぐに無感情で冷静な顔に戻る。

「 」のノートは検証して、今から2時間以内でこの場で燃やします。そのルールに変更はありませんよね 」

二アがもう言つとリコーカは黙つて頷いた。

「 死神大王と取引するのも面白いからな。そのうか、大王が怒つて俺を殺すかもしれないが、そうなればお前の勝ちつてことになるのかもしれないな 」

「 それは良い事を教えて頂きましたね 」

「 じゃあ、またな 」

巨大な翼を広げ、死神リュークは雑居ビルの壁をすり抜けてベルリンの大空へと舞い上がった。

「思ったより面白い奴だったが、思ったよりも早く終わつたな」

リュークは赤紫に染まつた大都市の空に舞いながら、背中から真っ赤なリングゴを取り出して頬張る。

ドイツのリングゴもなかなか美味しかつた。

「しかしあつぱり、あの最初に食べた蜜入りリングゴが忘れられないよなあ……」

たまにはマリオゴルフもやつてみたいしな。

そうだ、また日本に行こつか。

一路東へ進路を取り、沈みかかった夕日を目指して、リュークは力強く翼を上下させた。

あの、始まりの国に向つて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5331ba/>

---

夜神サユの場合

2012年1月14日19時46分発行